

森の会ニュース

第三号

2003年6月30日発行

編集・発行

森の仲間たち

雑感

地域科学部部长 竹森正孝

いま私は、40名ほどの憲法や行政法の研究者とともに、「地方自治と憲法」研究会に参加することを楽しみにしている。隔月ごとに東京で2時間ほどの研究会をもち、その後1時間ほどはいっしょにランチをとりながら、研究会の内容の続きや各地の大学での学内行政（国立大学や公立大学の法人化の問題など）の話で苦労話をしたり、一方的なイラク侵攻という理不尽で野蛮なアメリカのユニラテラリズム（単独行動主義という訳があげられることが多い）への憤懣をぶついたり、ランチ・タイムはあつという間にすぎてしまう。その後は、各自また午後からの別の研究会に出かけたり、私のように神田の書店や古本屋をまわったりで様々である。

この研究会は、この春勤草書房から『資料 現代地方自治—「充実した地方自治」を求めて—』という資料集を出版した。研究会が発足してから、すでに4年ほどになる。私が岐阜大学に赴任したとき、この研究会の発足の時期はほぼ同じであった。この後しばらく研究会を継続したところで研究成果は論文集として刊行することを予定している。

もとより、私が主として専門とするところ

は、ロシアの政治・憲法やその学問である。この資料集で担当したところも研究会で報告したテーマも、現代ロシアの地方自治についてのものである。研究会は、個々の参加者の研究対象の違いを超えて、現代の立憲主義や民主主義（両者は緊張関係にあるが）にとって地方自治が不可欠であること、わが国の地方自治の現状には大いに問題があること、「地方分権」の時代といいながら、中央政府主導の「分権化」には大きな矛盾と限界があること、などについての大方の共通理解がある。戦後の地方自治の発展を踏まえ、いまそれを後退させることなく、「充実した地方自治」への課題を提示することが求められている。そのためには日本と世界の「地方自治」の歴史とその比較検討を改めてやり直してみる必要がある。資料集が、わが国の歴史とともに世界各国の事例、現代の地方自治の充実に関する最先端の問題状況などを広く収めた背景にはこうした問題意識があった。私も、編集委員会の一角に加えていただいた。

わが国の憲法は、その第8章に「地方自治」の章を設けている。当時の世界の憲法でも独自の章を設けていたところはほとんどなかつ

た。ところが、最近の各国憲法では、むしろ特別の章を置くのがふつうといった状況になっている。その背景には、1985年に結ばれたヨーロッパ地方自治憲章の存在があったといえる。現行のロシア憲法（1993年制定）にもその影響は明らかであるし、95年に制定された「地方自治法」（略称）もまたそのベースのひとつをそこに求めたのであった。

しかし、このヨーロッパ地方自治憲章の意義はこれにとどまらない。やがてヨーロッパ地域自治憲章へ、そして現在は世界地方自治憲章の制定へとその動きを拡大させてきた。こうした動きを貫く基本思想は、「補完性の原理」といわれるものであるといいであろう。その意味するところは、ヨーロッパ地方自治憲章によれば、「地方自治体は、法律の範囲内で、その権能から除外されていない事項又は他の当局に配分されていない事項に自らの発意に基づいて取り組む自由を有するものとする。公的な責務は、一般に、市民に最も身近な当局が優先的に遂行するものとする。」（憲章4条2、3項）という規定に表現されている。

「補完性の原理」とは、もっとかみくだけば、下級の団体が自ら履行できる職務を、この団体から奪って、より広域の上級団体に委ねることは不正義であり、上級レベルの当局は、下級レベルの当局がその責務を達成できるように援助する義務があるという考え方である。日本国憲法にいう「地方自治の本旨」も自治確立の取組を通じてそうした内容をだんだんに確保してきたと考える憲法学者も少なくない。この言葉は、地域科学部のほかの

教員の講義でも聴かれたことがあるだろう。さまざまな理解がなされているようであるが、少なくともヨーコッパで含意されているのは、以上のような内容を含むものである。詳しくは、先に紹介した資料集をぜひ参照していただきたい。わが国では、この原理を、上からの市町村合併の誘導（ときには押しつけを伴いながら）を正当化するために、単なる行政担当団体間の役割の適正配分原理だと理解する向きも政府関係者のなかにはあるようである。これは、基礎自治体が総合行政主体であるためには合併によって大きくならなければならない、小さな自治体では権能の「適正配分」を受ける資格がない、といった論法になって現れている。しかし、先に紹介したように、こうした議論ははなはだ恣意的だといわざるをえない。今日の「地方分権」の名のもとに進行している「構造改革」は、はたしてこうした世界の動きをよく見極めたうえでのものであろうか。少なくとも一歩立ち止まってよく考えて見る必要があることだけは間違いなさそうである。

私は、「地域を科学する」という場合、この「補完性の原理」はキー概念のひとつともなりうるものとなると考えている。地域課題へのアプローチは、もちろん多様であり、それをどれかひとつに収斂させることは間違いだといわなくてはならない。しかし、ダムや橋、道路などのインフラ整備の公共事業に傾斜してきた従来型政策ではなく、ナショナル・ミニマムをこうしたインフラに限定してもう達成された、次は個性を持って競争力をつけなければならないといった式の議論ではなく、

地域の福祉や教育は公的機関が責任を持ち、長期に続く不況の結果、地域社会にも深刻な社会的ひずみが生じていることを直視して、それぞれの地域の特性に見合った地域づくりを他の地域との協同によって構想することこそが大事なのである。この側面では、わが国は先進諸国などに遠く及ばず、ナショナル・ミニマムの達成はなお重要な課題である。昨今の長期化した不況の下、その必要性、緊急性は増しているというのが実態である。競争主義は、勝ち負けという結果を生み、勝ち組は勝ち続ける以外に安堵の地を得られない。負け組は、復活をかけて無理な競争をするため、いっそうの効率主義的な手法に走らざるを得なくなる。そろそろ発想を切り替えられないものであろうか。いまや「のんびりやろう」といったスローライフ構想さえ、こうした新自由主義的政策とたたかわずにはかなわないものとなっていることを軽視できない。

私が考える「地域を科学する」際のキー概念には、こうした地域社会づくりを展望するうえで不可欠な「内発的発展」論や「維持可能な地域社会」概念も含まれる。もちろん、それぞれに論争的な内容も孕んでいるだけに、大いに議論しなければならない。総合的、学際的に科学するということは、予定調和的な議論ではなく、厳しい相互の批判的な議論が不可欠である。相互の尊重と信頼をベースに、地域科学部が研鑽と議論を蓄積していけば、その将来は明るいと思うのである。

地域科学部・地域科学研究科の卒業生・修了生が、「森の会」を結成し、それを支え、発展を期しておられることに敬意と感謝をお伝えしたいと思いつつ、現在私が主たる関心を寄せる研究課題にかこつけて「雑感」を述べさせていただいた。とりとめのないものになったことをお詫びする。最後に一言。地域科学部が社会的に認知されるのは、教員の日頃の教育・研究活動や社会貢献などももちろん大事であるが、長い目で見れば結局はその卒業生たちの社会での活躍いかんによるところ大であろう。この「活躍」とは、自治体の幹部職員、経営者など産業界のリーダーなどのみを想定する必要はない。そういった活躍をする人も少なからず出てくることであろうが、同時に、そうした「活躍」に限定されないさまざまなタイプの地域社会の担い手のあり様もまた大事であることを強調しておきたいと思うのである。

また、これからの地域社会は、予想もつかないような諸課題を次々と生起させてくることは間違いない。大学で学んだことはすぐに陳腐化する可能性だってある。大学で得た力は道具ではなく、上壤のようなものであって、これを肥沃なものとして維持できるかどうかは、卒業後の取組いかんにかかっている。肥沃な土地には豊かな実りがある。学部卒業生が3回、修士課程修了生が1回の若い同窓会ではあるが、今後に期待し、大いに依拠させていただきたいものである。

熱いメッセージをありがとうございました。

会員からのメッセージ

松平万史

(2002年度卒業)

学部を卒業して、はや一ヶ月が過ぎました。現在、私は研修にて、業界知識やビジネスマナーなどを学んでいます。

就職後、痛感したことは「時間の大切さ」です。学生時代は時間を自由に使えましたが、社会人になると会社という組織の中で一定のルールに従って働くことが求められます。また、お客様の都合を考えたり、スキルアップのためには勉強も必要です。しかし、仕事だけの生活では、モチベーションを維持できず、勤務中にミスをしてしまうでしょう。私は一ヶ月間の社会人生活を通して、自分の時間は自分で作るものだと考えるようになりました。毎日目標を設定し、それを達成した後は気分転換や趣味に時間を費やしています。そうすることで生活にメリハリができ、苦勞して作った時間だからこそ、より有意義に過ごすことができます。学生とは違い、肉体的にも精神的にも辛い面はありますが、充実した日々を過ごしています。

社会人一年生のみなさん、時間を自分なりにコントロールすることで、それぞれの夢に向かって前進しましょう。

岐阜大学の職員として

鬼頭利佳

(2000年度卒業)

今年の3月まで岐阜大学の学生であった私は、4月から職員として通い慣れたこの岐阜大学に来了います。地域科学部とは離れた工学部が今の私の職場です。研究協力室に配属され、慣れない仕事に右往左往しています。ここでは、先生たちの研究費にかかわる事務(簡単に言えば・・・)を行っています。生徒よりも先生と接することが多く、電話の対応、メールの書き方など気を使う毎日です。担当する学科があり、私は化学担当ですが、30人近い先生の名前と顔を覚えるのが精一杯です。周りの先輩方にフォローされることもありますが、毎日頑張っています。

警察学校の一端

牛田 陽子

(2000年度卒業)

若葉が美しい季節となってきました。皆様いかがお過ごしですが。私は現在、岐阜県警察学校に入校しています。つまり、警察官のたまごです。

入校当初は想像以上の厳しさに、警察官という道を選んだことを後悔することも(少し)ありました。「声が小さい」、「敬礼(お辞儀)がそろっていない」などと教官には毎日怒鳴られ、警察独特の言葉遣いに戸惑い、移動は常に駆け足 etc という生活です。学生時代はのんびりしていたと実感しました。一ヶ月間は外出禁止、携帯電話も禁止、もちろん漫画等も禁止の生活での楽しみは、食事、入浴、睡眠、友達とおしゃべりです。そのため、一ヶ月にも満たない短い時間で、ご飯を食べるスピードが速くなり、食べる量も非常に増えました。また、時間が空くと運動するという習慣が付きそうです。

初めはつらかったこの生活にも随分と慣れ、楽しむこともできるようになってきました。9月末の卒業を目指し、警察官としての基礎を固めるために、これからも頑張りたいと思います。

大学をはなれて

永田尚子

(2000年度卒業)

岐阜に来て5年目になりました。私は今「ぎふまちづくりセンター」というところで働いています。ここの説明をすると長くなるので、どうかHPでじっくり見てください。

さて、通称「まちセン」と呼ばれる私の職場には、主婦・主夫、サラリーマン、自営業者等々、様々なひとが集まってきます。居住地も岐阜市にとどまりません。集まってくるひと達の話をおっそり聞いていると、「地域科学部」という言葉を耳にし、知られていないようで、意外と知られているんだと驚きます。実習などで、学生や先生がまちの中に入っている様子を実によく見ているのです。実習などの報告書を丹念に読んで下さっている方も少なくありません。決して良い評価だけではありませんが、それだけ皆さんが地域科学部に注目しているのだと実感する社会人2ヶ月目です。

「結構知っていたらいい」と嬉しく思う反面、卒業生としてプレッシャーを感じる今日この頃。

京大取組 - 進路状況

2003年3月卒業生(110人)の進路状況(単位:人)

2003年4月15日現在

単位:人

		求職・希望者数	決定者数
就職希望者	企業志望	建設業	4
		製造業	8
		金融業	14
		運輸・情報	10
		卸・小売業	16
		不動産業	1
		サービス業	13
	公務員志望	国家公務員	1
		市役所	1
		町役場	4
		岐大医学部	1
		警察官	4
		消防局	2
		合計	91
進学希望者			
本学部大学院		16	16
合計		16	16

大学院地域科学研究科

2003年度3月修了者進路状況

2003年度4月15日現在

単位:人

		求職・希望者数	決定者数	
就職希望者	企業志望	建設業	2	
		製造業	3	
		教育	2	
		サービス	3	
	公務員志望	県庁	1	
		市役所	1	
		岐阜大学	2	
		警察官	3	
	合計		20	17
	進学希望者	本大学院農学研究科	1	1
本大学院工学研究科		1	1	
合計		2	2	

《新役員決まる》

2003年度の役員は以下の12人です。2002年度卒業の正会員が2名新たに加わりました。

会長：浅井彰子①

副会長：伊藤雅浩①、永田尚子①

幹事長：加地和歌子①

幹事：浅野善信①、牛田陽子①、田中幸恵②、村本みどり③

会計：大竹裕美②、荒瀬修三③

監査：中嶋英理①、鬼頭利佳①

*①：2000年度卒業、②：2001年度卒業、③：2002年度卒業 を表します

仕事や勉学の合間をぬっての同窓会運営の業務はなかなか大変です。でも、地域科学部の先生方や学務係の皆さんが第1期の卒業生を出す前から「同窓会設立準備会」を作って育てて下さったおかげで、この森の会は存在します。第3期の卒業生を新たに正会員として迎え、特別会員の先生方も含めて総勢約430名となった地域科学部同窓会「森の会」が皆さんの憩いの場となるように、役員一同力を合わせて務めてまいります。どうぞよろしくお願いたします。

会長・浅井彰子

2002 年度 会計報告

(単位：円)

収入の部

繰越金	5,319,647
会費	970,000
利息	184
2001 年度祝う会より	128,000
合計	<u>6,417,831</u>
	------(A)

支出の部

事業費	10,290
事務費	2,200
通信費	16,120
会議費	8,917
祝金 (2002 年度祝う会へ)	50,000
合計	<u>87,527</u>
	------(B)

収支 (差引残高)

(A) — (B) 6,330,304

会計書類等を監査したところ、適正に執行されている事を認めましたので、報告します。

2003 年 4 月 1 日

監査

丸山 陽一郎



監査

中嶋 英理



《第2回同窓会総会&懇親会 開催予定!》

第2回同窓会の総会を下記のとおり開催する予定です。詳細は、後日お知らせします。

日時:2004年2月15日(日) 14:00~

場所:岐阜市内のホテル

2004年3月で白樫久先生、中村梧郎先生、松田利之先生、村井龍彦先生が地域科学部を退官されます。そこで、4名の先生方の退官記念の会にもできれば・・・ということで、4名の先生たちへの「質問大会」などを検討中です。

「あの時は聞けなかったけど、今なら聞ける・聞きたい」ことを皆さん聞いてみませんか？

先生方への「質問」を大募集します。また、懇親会のプログラムに関するアイデアも募集します。楽しい企画をどしどしお寄せください。

●●連絡先●●

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 岐阜大学地域科学部内 森の会

E-Mail : mori2001@gumail.cc.gifu-u.ac.jp

～ お 願 い ～

森の会ニュースと一緒に2002年度の卒業生と修了生の名簿をお届けします。誤字や訂正などありましたら、メール(上記アドレス)でお知らせください。2000年度、2001年度卒業の方たちも変更がありましたら、ご連絡ください。お手数をかけますが、よろしく願います。

編集後記

来年2月に同窓会を開催しますが、そのあとの退官記念質問コーナーが今から楽しみです。先生たちにあんな質問、こんな質問をしたらどんなふうに答えてくれるんだろう・答えてくれないんだろう・・・と想像しています。

皆さんの聞きたいことは何ですか？

さて、皆さんのもとへ森の会から、突然、原稿のお願いが届く事があります。原稿依頼があつたとてもラッキーな方は、お忙しいと思いますが、是非思いの丈をお寄せください。「自分のところにはどうしてこないの？」と原稿依頼を待っている方。遠慮なく原稿などいろいろ送ってください。

(森の仲間・永田尚子)